

●論文

農学系学生による高齢者宅への訪問園芸活動の実施とその評価

本田ともみ・岩崎 寛・三島孔明 千葉大学大学院園芸学研究科

Evaluation of the home visiting horticultural activity for elderly people by the university students majoring in agriculture and horticulture

Tomomi Honda, Yutaka Iwasaki,
Koumei Mishima

Graduate School of Horticulture, Chiba University

Abstract

The purpose of this study is to clarify the effect of home visiting horticultural activity on students and elderly people. The case study was performed from May until July 2012. Eighteen students (5 males, 13 females) were arranged to 4 elderly residents to support horticultural works. Comments and behaviors by all participants and questionnaires to the students were analyzed based on Grounded Theory, i.e., this was a qualitative research. As a result, elderly people often made a comments and behaviors regarding "management conditions of their garden". In almost same frequency, they also had a "contact with students". This activity has given elderly people a sentiment of satisfaction not only from their garden improvement, but also from interaction with students. In addition, this satisfaction was suggested to be a motive for continuous participation in the activity. Furthermore, since this activity itself matched with students participation motive, led to improve their motivation in their specific studies. In conclusion, since both elderly people and students can gain the satisfaction and motivation for the continuous participation, we believe this activity has potential to lead the community care in the future.

Key words : Students Majoring in Agriculture and Horticulture, Elderly people, Home Visiting Horticultural activity, Community care

キーワード：農学系学生，高齢者，訪問園芸活動，地域のケア

はじめに

少子高齢化が進む日本において、2005年の介護保険法改正によって、高齢者の予防重視型システムが創設され、要支援・要介護状態を予防する「地域支援事業」が始まる（北川ほか、2005）など、地域でのケアが展開されている。しかし、地域のケアを担当する看護師や保健師などの人材は不足しており（土田、2010）、地域における人材を育成することが課題となっている。

福祉に関する人材育成については、若いうちにボランティア経験を積むことの重要性が指摘されていること（Hooghe, 2003）や、近年、教育再生などの観点から、ボランティア活動を若年層に啓蒙・普及させようとする動きが活発になってきている（水野ほか、2007）。よって、若年層の多くがボランティア活動を経験する機会は以前に比べて増えたと考えられる。しかし、これらの取り組みは人間形成を図るのに有効だと考えられる反面、授業として半強制的に行なわれることや、特に社会福祉分野の活動においては体験の対象者を配慮しない、自己本位で一方的な関わりになる恐れがあるなど、人材育成の観点から問題点も指摘されている（佐藤、2001）。

そのような人材を確保するにあたり、ボランティア活動への参加意欲を調査した国民生活選好度調査（内閣府、2011）では、「自ら参加したい」と回答した人の割合は合計で50.3%となっており、潜在的には活動意欲のある人材が存在していることが示唆されている。これらの人材を幅広く育成することが、将来的に高齢者のQOL向上にもつながると考えられる。

その一方、高齢者のQOL向上に園芸活動が有効であることが報告されている（豊田、2008）。地域での高齢者ケアに園芸活動を導入しようとする場合、高齢者宅の庭が活動場所の一つとして考えられるが、高齢者の生活困難の実態を探る調査結果で「庭木の手入れ」は、「粗大ごみ出し」・「電化製品故障修理」・「高いところのものを取る」に次いで挙げられており（京都市山科区社会福祉協議会、2008）、これは、自宅の庭を高齢者自身が管理することの困難さを示す結果と言える。

そこで、地域ケアの人材をより幅広く確保し、その活動の在り方を模索するため、庭の管理に困難を抱える高齢者宅に訪問し、QOL向上やコミュニケーションの創出を目的として行なう園芸活動を「訪問園芸活動」として実践を試みた。

そして本活動における新しい地域ケアを試みる実施者として、福祉に対して理解を深めていくべき青年期で、福祉と

植物に関心のあると考えられる「福祉に関心のある農学系学生」を募集し活動を展開した。

本研究では、上記で挙げた「訪問園芸活動」を取り上げ、本活動が高齢者と学生に与える影響について検証することを目的とした。特に、高齢者のQOL向上につながると考えられるコミュニケーション創出の効果について、その発話や行動内容を分析することにより、これらの活動が地域ケアとしての補助的な役割となる可能性について検討することとした。

材料および研究方法

研究対象・期間

訪問園芸活動は、高齢者ケアを目的としているので一回限りではなく継続した活動が望ましい。そこで平成24年5月～6月の間に、3回継続して訪問した高齢者宅3軒（A～C宅）

を選定した。また、高齢者宅に通いやすい条件が継続にも関与すると考え、同市内の福祉に関心のある農学系大学生、大学院生（計18名、延べ人数31名）に参加を募り実施した。各家の属性と学生の活動参加人数は第1表に示した。

活動内容

訪問園芸活動実施からデータ収集までの流れを第2表に示した。庭に困難を抱える高齢者と福祉に関心のある農学系学生を募集し、学生には事前研修・準備の段階を経て、活動に参加してもらっている。具体的な訪問園芸活動の内容は第3表に示した。訪問1回目は全軒共通して、庭の下見を行ない、高齢者と交流時間を確保した。2、3回目は各軒で多少の差異は見られるが、概ね除草作業、剪定作業と交流が主な活動である。

第1表 各高齢者・学生の属性と学生訪問人数

	A宅	B宅	C宅
独居・夫婦の別	夫婦	夫婦	独居
性別・年代	男：80代 女：80代	男：80代 女：70代	女：80代
持ち家・借家の別	持ち家	持ち家	持ち家
庭の管理状況	主たる管理者は夫。足を悪くし、管理が困難。	主たる管理者は妻。体調を悪くし、管理が困難。	主たる管理者は夫だったが、死別。現在は妻ができる範囲で管理。
活動に参加した 学生数（人）*1	1回目	3	2
	2回目	4	4
	3回目	4	3
学生 平均年齢*2	20.6歳		
学生 性別	男 5名 女 13名		

* 1 複数回参加している学生もいるため、延べ人数は31名となっている。
* 2 社会人学生が4名含まれており、通常の在学年齢を超えてしまうため、ここでは除いた。

第2表 訪問園芸活動の流れ

活動の流れ		
募 集	高 齢 者	「学生が庭の管理をお手伝いします」という内容のチラシを作成。地域の回覧板での配布と、掲示板への掲示を自治会に依頼。電話にて受付をし、基本的な情報を得た。
	学 生	園芸福祉・園芸療法の実践の場として、高齢者と植物を介して関わってみたい学生を募集した。
事 前 研 修	高齢者の方と植物を介して会話をすることに重点を置き、継続した活動を維持できるように指導した。	
準 備	依頼された樹木の剪定方法を調べることや、当日使用する道具の確認などを行なった。	
活 動 内 容	1回目：現地の下見（約30分）、交流（約30分） 2～3回目：剪定・除草作業など（約1時間）、交流（約30分～1時間）	
データ収集方法	各活動後に学生一人一人が、作業中の高齢者からの発話・行動を想起してもらい、付箋に記入してもらった。	

第3表 全軒の活動内容

	A	B	C
1 回目	現場下見・庭に関する要望を確認する（全軒共通）		
2・3 回目	除草作業 ツツジの剪定	ツタの除草 キクの除草 ミズヒキの除草	アジサイの剪定 細いタケの伐採 ドクダミの除草 梅の実の収穫

調査・分析方法

発話・行動記録

活動終了後、参加した学生に活動中の高齢者との会話内容、発話や行動などを記録してもらった。これらの記録から、訪問園芸活動中の高齢者と学生のかかわりを分析するために、人間関係を研究対象としている地域看護学の研究に着目した。本研究では、看護の日常的な実践において、よりの確に捉えることができる研究方法論としてグラウンデッド・セオリー・アプローチ（岡村，2004）を援用することとし、本活動から得られる理論を検証する。

グラウンデッド・セオリー・アプローチにおける分析手順は、記録物に記述されている内容を詳細に判読し、記述内容1文章を最小文脈単位として抽出し、この文脈単位をデータとした。次にこれらを精読し、記述内容を抽出「コード化」し、その類似性により分類し、その内容を忠実に反映した「サブカテゴリネーム」を命名した。さらに抽象度を上げて「カテゴリ」を形成した。

妥当性を高めるために、「コード化」から「サブカテゴリ」の過程で、無作為に抽出した学生数名に、言動の意図を確認し、データ解釈の妥当性を検証した。

ヒアリング調査

訪問園芸活動を受け入れている高齢者宅3軒、男女4名に対して行った。活動終了後に「学生が訪問して庭管理作業をすることの良かった点、悪かった点、これからも依頼したいか」を質問し、得られた結果を最小文脈単位として抽出し、前述したグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いてコード化し、分析した。

また学生において、活動中に「植物の知識が足りないと思った場面」、「その場面で自分がどのように考え、行動したか」について、補足的に調査を行ない、分析方法は上記同様にを行った。

質問紙調査

今回の訪問園芸活動に参加した農学系学生18名を対象に行った。質問項目は「活動参加動機」、「活動の感想」、「在学

時・卒業時の活動継続意欲とその理由」とした。

データの収集方法は対象者18名にそれぞれ配票調査で行なった。平成24年6月25日～7月6日に回収し、有効回答数は18（回収率100%）であった。

倫理的配慮

研究対象者には研究の意図・結果は研究以外には使用しないことを口頭で説明し同意を得た。また学生・高齢者の個人名が限定されないようにデータ処理時は、個人名を削除して行なった。

結果および考察

訪問園芸活動の高齢者に対する影響

高齢者の発話・行動内容

大学生による訪問園芸活動が高齢者に与える影響を把握するために、発話および行動記録、計196件を分析した。これらの内容を分析した結果、最終的に「高齢者の庭・植物管理状況」、「高齢者と学生の関わり」、「高齢者の人的環境」、「高齢者の生活状況」、「高齢者の身体状況」の5つのカテゴリに分類された（第4表）。

表より、「高齢者の庭・植物管理状況」に関する発話・行動が65件と最も多く、これらの発話は、全ての家庭から抽出された。「高齢者の庭・植物管理状況」の詳細としては、庭管理の要望や管理の問題点が多く挙げられていた。

一方、その他のカテゴリを見ると、本活動から生まれた発話や行動は「高齢者の庭・植物管理状況」といった庭や植物に関係するものに限らず、高齢者の生活や身体状況、人的環境といった内容も多く含まれていることがわかった。特に「高齢者と学生の関わり」は63件であり、「高齢者の庭・植物管理状況」とほぼ同数であった。上述の結果から、学生による高齢者宅での園芸活動は、高齢者の園芸や植物に関する発話や行動を導くだけでなく、幅広い発話を生み出す可能性があると考えられた。

また、「高齢者の人的環境」、「高齢者の生活状況」、「高齢者の身体状況」に関する発話や行動は、通常地域の看護師・保健師が行なう訪問看護時のアセスメント項目にも含まれている（樋口ほか，2008）ことから、訪問園芸活動を通して、高齢者の健康や生活状態の確認を行うことがある程度可能であると考えられた。

高齢者の活動に対する意識

訪問園芸活動を行った高齢者4名に対して、3回訪問した後に本活動についてのヒアリング調査を実施した。ヒアリングにより得られた内容を最小文脈単位で抽出、コード化した結果、全部で16の記録数を得られた。その結果を表4に示した。

第4表 発話・行動記録とヒアリング内容のカテゴリ表

カテゴリ	サブカテゴリ	内 容 例
高齢者の庭・植物管理状況 (65)	庭管理の要望 (18)	スズランは全部とっていいわ
	管理の問題点 (15)	今年は2つしか咲かなかったの
	庭管理者 (14)	年末に植木屋さんは来るが草とりまでは……
	植物を愛でる (7)	ハマユウいいよ～
	植物を誇らしげに話す (5)	ぼたんが自慢らしい
発話行動記録	植物を利用する (4)	梅はどうされるんですか？→梅酒にするの
	他者との関係 (2)	いろんな人に花の穂木をあげていた
	学生との関わり (63)	九州の長崎出身なのよ
	学生と接点を持つとする (11)	写メで撮った庭の花を見せてくれた
	学生に質問する (9)	みなさんはどこに住んでるの？出身は？
高齢者の人的環境 (26)	学生が来ることを喜ぶ (9)	学生が来てくれることが自慢、嬉しい
	学生をもてなそうとする (7)	お茶とおだんごくれました
	作業後の感想 (5)	ツツジさっぱりしてよかったです
	学生に助言をする (3)	若くて元気なうちにいろいろなところへ旅行へ行っただ方がいいよ
	継続意志 (3)	続けてまた来てくださる？
高齢者の生活状況 (24)	家族 (12)	庭ではお孫さん達とバーベキューをしていた
	近隣住民 (10)	作業中、他のお宅の方から声をかけられた
	ヘルパー (4)	ヘルパーさんが来る
	住居環境 (11)	明治34年から住んでいる
	趣味 (10)	以前はお茶をやられていた
高齢者の身体状況 (18)	日常生活 (3)	料理は夫婦二人で作っている
	身体状況 (15)	3年前からお庭手入れ作業できなくなった
	通院 (2)	週3回、奥さんは病院に月・水・金で通っている
	年齢 (1)	奥さん84歳
ヒアリング内容	植物の管理に対する満足感 (3)	庭管理をしてくれる (3)
	学生とのコミュニケーションに対する満足感 (9)	足腰が悪くなり庭管理ができてなかったので助かった 枯れてもしょうがないと思ってたので助かった
	学生とのコミュニケーションに対する満足感 (9)	学生と話すことの楽しみ (4)
	学生とのコミュニケーションに対する満足感 (9)	年寄りには若返りますよ、学生さんと話すと 素直な方々ですよ
	学生とのコミュニケーションに対する満足感 (9)	学生の話しやすさ (2)
継続的な訪問の要望 (3)	学生に継続的に来てほしい (3)	シルバー人材の人よりも要望が言いやすいですよ
	学生に継続的に来てほしい (3)	今後も続けて来てほしいです

* () 内の数字はコード化したデータ数を示す。

ヒアリング内容を整理した結果、「植物の管理に対する満足感」、「学生とのコミュニケーションに対する満足感」、「継続的な訪問の要望」の3つのカテゴリに分類された。これらの3カテゴリは、全軒から発言されていたことから、偏った意見では無く、全体の意見として取り扱えると考えられた。

「植物の管理に対する満足感」は、前述の発話行動記録で、高齢者から庭管理の要望が多く挙げられていたことから、高齢者が庭に抱える問題が多く、それらがある程度解決したことは高齢者の満足感を向上させる要因になったと考えられた。

また「学生とのコミュニケーションに対する満足感」も発話行動記録を合わせて考察すると、「高齢者と学生の関わり」に関する発話・行動も多く見られ、高齢者が「学生の質問に

答える」、「学生と接点を持つとする」などが見られた。このことは、学生から高齢者に質問するという働きかけや、逆に高齢者からも学生に働きかける様子が伺え、それによって学生と高齢者の間での関係性が構築できたと考えられた。よって、このような双方向からのコミュニケーションが成立したことで高齢者が満足感を得られたと考えられた。

またこのような満足感とともに、全軒から継続的な訪問の要望もあったことから、植物の管理及び学生との交流が円滑に進むことが、活動の継続に繋がる重要な要素であると考えられた。

学生の意識に与える効果

活動前における意識

活動前の意識を把握するため、学生の活動参加動機について聞いた結果を第1図に示した。

その結果、最も多かった回答は、「福祉に対する理解を深めるため」であった。その他、回答者の半数を越えていた項目は「高齢者の役に立ちたいため」、「植物に対する理解を深めるため」であった。上位2項目は「福祉・高齢者」に関する項目であり、自らの専門分野である「植物」に関する項目よりも上回った。

今回、福祉に関心のある学生を募集したことから、このような結果になったと考えられた。近年、高齢化が社会問題として取り上げられていることから、農学系学生でも興味や関心を持っていることがこの結果からも伺えた。しかし、これらの分野では、福祉・医療の分野を実践的に学べる機会はまだまだ少ないと考えられることから、本活動が参加学生の福祉分野に対するニーズを補う役割を果たしたことが推察された。

活動後における意識

活動後の学生の意識を把握するため、活動後の良かった点、困難だった点を聞いた結果を第2図に示した。その結果、困難だった点に相当する「植物の知識が足りなかった」が最も多い回答数であった。この項目についてさらにヒアリング調査を行った結果を第5表に示した。表を見ると、知識不足を感じた場面として、「園芸に対する相談を受ける」、「管理作業の依頼を受ける」などの「高齢者から相談・依頼を受ける」場面であった。それに伴い、学生は「植物名がわからない」、「栽培・管理方法がわからない」など「園芸に関する知識不足」を認識していた。その後、「本」や「インターネットで調べた」、あるいは「仲間に尋ねた」など、「学生の身近なツールで調べる」という行動を取る学生がいた。さらに「植物の

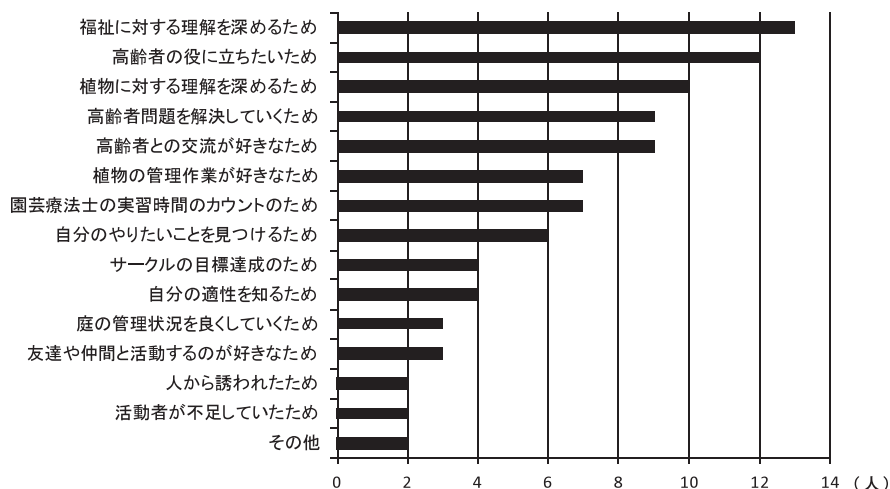
名前を知りたい」、「新しいスキルを身につけたい」など「植物の知識や栽培管理技術について学びたい」という意欲を示す学生もいた。

よって、「植物の知識が足りなかった」という回答は、活動に対しての消極的な意見ではなく、これをきっかけに知識を得ないといけないという学習意欲に結びついた意見であると考えられた。

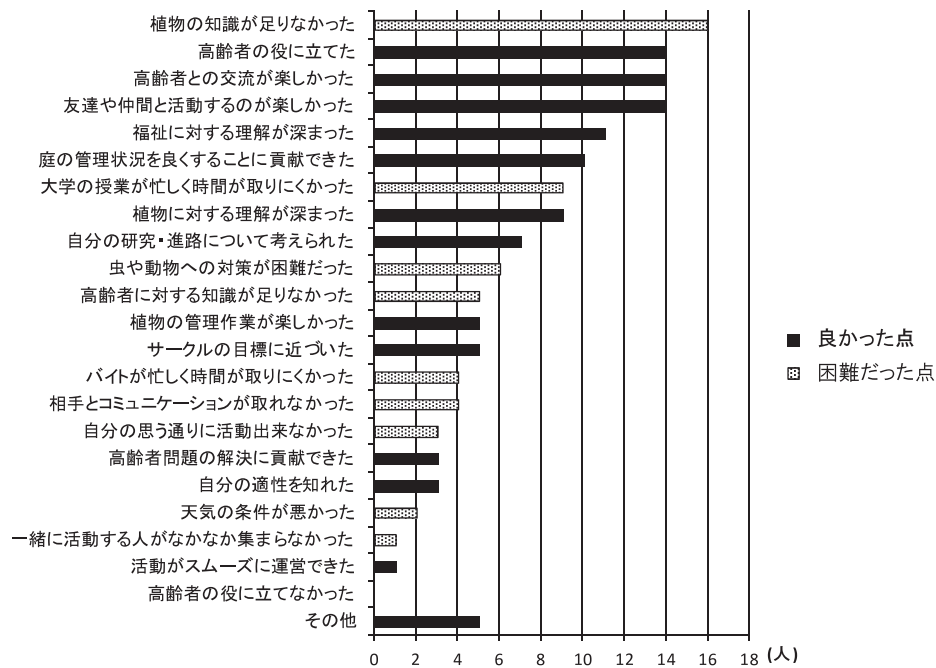
次いで「高齢者の役に立てた」、「高齢者との交流が楽しかった」、「友達や仲間と活動するのが楽しかった」が挙げられた。「高齢者の役に立てた」は、既往研究において「援助成果がボランティア活動の継続を動機づける心理的な中核的要因」であることが確認されていることから（妹尾，2008）、本活動のような高齢者への援助成果が見えやすい活動を実施することは、学生の活動継続につながると考えられた。

また「高齢者との交流が楽しかった」、「友達や仲間と活動するのが楽しかった」は、高齢者や友人などの「人と関わる楽しみ」に関する項目である。前項の参加動機で「高齢者との交流」を好んで活動参加した学生は約半数いたが、「友達や仲間との活動」自体に関心を持っていた学生は少数であった。しかし、活動後には多くの学生が良かった点として挙げていたことから、活動当初学生が期待していなかった「友達や仲間」という要素が、活動後には学生同士の人間関係も構築することに寄与できたと考えられた。教育心理学分野の既往研究において、友人は年齢段階に応じた発達課題の達成を助けるものと考えられていることから（岡田，2008）、学生が本活動を行なうことは、学生にとって成長を促す機会を創出することにも寄与できると考えられた。

また、「福祉に対する理解が深まった」という回答も過半数を越えていた。前項の参加動機として最も多かった回答が「福祉に対する理解を深めるため」であったことから、本活動は学生にとって満足度の高い活動であると考えられた。



第1図 学生の活動参加動機 (N=18 複数回答)



第2図 学生の活動後の意識 (N=18 複数回答)

第5表 「植物の知識が足りない」と感じた場面と学生の意識・行動 (N=10)

カテゴリ	サブカテゴリ	内 容
知識不足を感じた場面	高齢者から相談・依頼を受ける (14)	園芸に対する相談を受ける (8) 管理作業の依頼を受ける (6)
	認識 園芸に関する知識不足 (18)	植物名がわからない (5) 栽培・管理方法がわからない (4) 自分の判断に自信がない (4) 高齢者からの指示がわからない (3) 高齢者とコミュニケーションが円滑に進まない (2)
学生の変化	行動 学生の身近なツールで調べる (10)	本で調べた (3) インターネットを利用して調べた (2) 仲間に尋ねた (2) 植物関連施設で教えてもらった (2) 現場に通いながら覚えた (1)
	意欲 植物の知識や栽培管理技術について学びたい (6)	植物の名前を知りたい (3) 新しいスキルを身につけたい (2) 授業でより学びたい (1)

* () 内の数字はコード化したデータ数を示す。

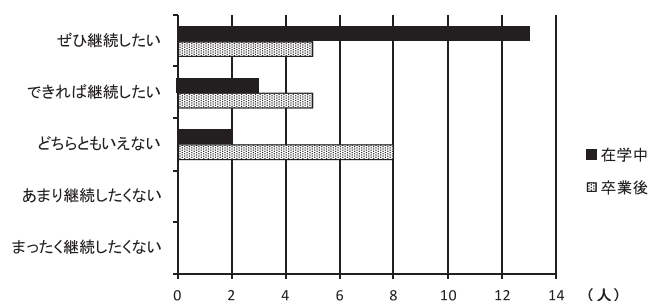
活動における学生の継続意欲及び継続理由

在学中と卒業後の活動継続意欲について聞いた結果を第3図に示した。図より、在学中ではほとんどの学生が「ぜひ継続したい」と回答していたが、卒業後は「どちらともいえない」が最も多い回答であった。継続理由を自由記述で尋ねた結果より、「仕事が忙しかったら活動まで時間も体力も手がまわらなそう」など、卒業後は活動意欲が下がったわけではなく、生活状態の不明確さにより、時間・体力などに不安を抱えている面が反映していると考えられた。このように社

会人になると活動の継続が困難であると考えていることから、今回のような訪問園芸活動は、大学在学中の実施に適した活動であると考えられた。一方で学生の卒業に伴う活動の継続性には課題が残る。

さらに第3図で「ぜひ継続したい」、「できれば継続したい」と回答した学生16名の活動継続理由を自由記述によって回答を得た。それらを分類した結果を第6表に示した。

その結果、「貢献意識」、「自己実現につながる」、「植物や福祉について勉強になる」の3つのカテゴリが抽出された。



第3図 在学中と卒業後における学生の活動継続意欲 (N=18 単数回答)

最も多い回答を得たカテゴリは「貢献意識」であった。詳細を見ると「高齢者の役に立ちたい」が多く、その他の項目では「学生であることを活かせる」、「勉強したことが活かせる」、「地域への貢献が実感できる」など、学生自身の経験や能力を活かしていると実感している様子が見受けられた。

既往研究より、「大学生はボランティア活動を始め、継続する上で、学び、視野を拡大し、人間関係を発展させ、自分を試せるやりがいのある活動をしたという動機が強い」(谷田, 2001) という報告も見られることから、本研究においても類似した結果が見られた。このようなことから、本活動は福祉に関心のある農学系学生が活動を継続しやすい要因を多く含む活動であると推察された。

総合考察

本研究結果を整理したものを第4図に示した。

本活動は、高齢者、学生の両者それぞれに有意義な効果をもたらすことがわかった。

高齢者に対しては、庭管理の困難な状況が学生によって改善された満足感と同時に、学生との交流自体も楽しみになっていた。そして、このような学生と関係を構築できたことが、活動への高評価や継続意欲に結びついた。さらに、幅広い発話が創出され、高齢者の健康・生活状況の確認ができるなど、訪問看護、ひいては地域ケアの補助的な役割を果たしていると示唆された。

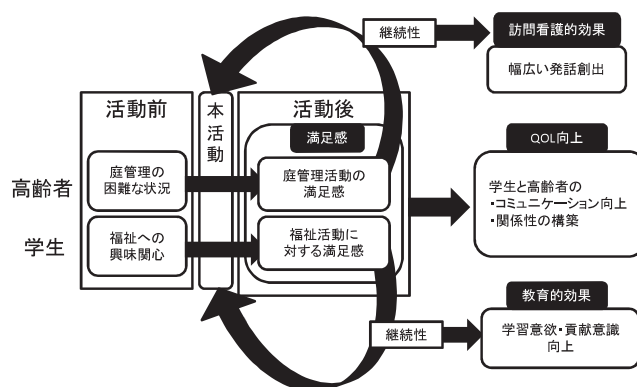
また学生に対しては、福祉・高齢者に関する動機と合致させることで満足感を高めると同時に、高齢者の役に立てたという貢献意識も得られ、継続意欲につながった。また、高齢者との関係性から専門分野に対する学習意欲を高める可能性が示唆された。

そしてこれらの継続的な活動が展開されることにより、医療や福祉関係の学部でなくとも、学生が専門性を活かすことができる可能性が示唆された。今後、地域の保健師と連携することにより、訪問看護の補助的な役割や、予防医学的観点

第6表 学生の活動継続理由 (N=13 ラベル数=19)

カテゴリ	サブカテゴリ	コード例
貢献意識 (8)	高齢者の役に立ちたい (4)	高齢者に活動の成果を残したいから
	学生であることを活かせる (2)	学生であることを活かせるから
	勉強したことが活かせる (1)	勉強したことが活かせる
	地域への貢献が実感できる (1)	地域に貢献している実感が持てる
自己実現につながる (6)	自分の行ないたい活動 (4)	自分のやりたいことと合っている
	活動を発展・継続させたい (2)	今後の発展を見ていきたいから
植物や福祉について勉強になる (5)	植物や福祉について勉強になる (4)	植物や福祉に関して勉強になるから
	経験を積んで知識を増やしたい (1)	知らないことが多いのもっと経験を積みたい

* () 内の数字はコード化したラベル数を示す。



第4図 本結果から得られた関係図

からの活動展開が期待できると考えられた。

今後継続的な活動を展開していく上で、費用、時間、プログラムの更新などの課題が挙げられる。これらの課題解決のためには、大学や行政機関と連携を図ることが必要である。また今回は農学系学生の専門性からのアプローチであったことから、「植物」を用いたことが良い結果に結びついたとも考えられる。また学生が卒業しても継続できるシステム、もしくは新しい学生が引き継げるシステムの構築が必要であると考えられた。

また、高齢者宅訪問ボランティア活動の意義に、「専門性による特徴」などの要因がどのように影響しているのかを明らかにするためには、他の専門性をもった学生の活動と比較し、検証していくことが必要である。

謝 辞

本調査を実施するにあたり、多大なご協力をいただきました高齢者、学生の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 樋口キエ子・赤沼智子・内田朋子（2008）在宅移行時アセスメントシートの開発の過程，臨牀看護，34(13)：2059-2067。
- 本田ともみ・岩崎 寛（2009）回復期の精神障害者に対する園芸活動の効果—活動実施前後における実施者および対象者の生理・心理的变化—，日本園芸療法学会誌，1(1)：23-27。
- Marc Hooghe（2003）Participation in voluntary associations and value indicators: The effect of current and previous participation experience, Non-profit and Voluntary Sector Quarterly, 32：47-69。
- 水野邦夫，加藤登志郎（2007）ボランティア活動への参加は個人の心理的成長に寄与するか？—ボランティア活動経験とパーソナリティ特性，社会スキル，充実感，ボランティア活動観の関連性からみた一考察—，聖泉論叢，15：141-156。
- 北川公子編著（2010）系統看護学講座 専門分野Ⅱ 老年看護学，医学書院，東京，371-373。
- 京都市山科区社会福祉協議会（2008）第2期地域福祉活動計画。
- 内閣府（2012）国民生活選好度調査。
<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/senkoudo.html>
- 岡田 涼（2008）親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築，教育心理学研究，56：575-588。
- 岡村 純（2004）質的研究の看護学領域への展開—社会調査方法論の視点から—，沖縄県立看護大学紀要，5：3-5。
- 佐藤 陽（2001）関係性に着目する青年期における福祉教育実践としての体験学習目的の明確化に関する考察，福祉教育・ボランティア学習研究年報，6：114-135。
- 土田耕司（2010）福祉現場における介護人材不足の背景，川崎医療短期大学紀要，30：41-45。
- 豊田正博（2008）高齢者を対象とした日本の園芸療法実践的研究の課題—実施施設，健康状態，活動形態，目標からの考察—，人間・植物関係学会，7(2)：15-21。
- 妹尾香織（2008）若者におけるボランティア活動とその経験効果，花園大学社会福祉学部研究紀要，16：35-42。
- 米澤美保子（2010）ボランティア活動の継続要因，関西福祉科学大学紀要，14：31-41。

（受付：2012年8月21日 受理：2012年11月1日）